

塔公で過すのは今日で最後にしようと思ったその日、何気なく立ち寄った串焼き屋の親子のところで半日を過ごした。徐々に町が薄紫色に染まり始める頃、串焼き屋台の女主人は店仕舞いの支度を始め、すっかり私になつた少女は、「ねえ、お姉ちゃんも一緒に家に来て!」と私の腕にしがみつく。私が自分の食べた串焼きの代金を支払おうと差し出したお金を、受け取ろうとしない母親に、娘が「お姉ちゃんも一緒に行っていていいでしょう!? いいでしょう!」と絡みつき、少女の母親も微笑みながら、「良かったらうちへどうぞ」と誘ってくれた。

夕暮れが近づくとともに、この家族と別れ一人で宿に帰る事が寂しくてたまらなかった私は、喜んでこの申し出を受け、ほんの行きずりで知り合ったばかりのチベット族母子と共に、夕暮れの塔公の町を家路についた。屋台の荷物を運ぶ若い母親を手伝いながら、子供達の手を引いて歩いていると、もうそれだけでちょっぴり幸せな気持ちになってしまう。普段の生活では当たり前過ぎて気付きにくい事だが、家族がいて、帰る場所があるというのはとても幸せな事だ。

彼らの家はお寺の脇の細い路地を少し入った場所にあった。単なる旅行者が町に住むチベット族家族の家に入れて貰える機会など、なかなか無いチャンスだろう。不意に得られた幸運に嬉しさでドキドキしながら、町の一角に密集して建てられた建物の隙間を縫うように、人一人がやっと通れるような細い路地をくぐり抜け、彼らの家に連れて行って貰った。

特にお金持ちでもなく貧しくもない、街で暮らす平均的なチベット族と感じられたこの親子の家は、ソファやテーブル、ベッドなどの家具も置かれ、思いのほか近代的な暮らしぶりに感じられた。部屋の中央に置かれたテレビは、少女のやんちゃな小さな弟が、いつもこれで中国剣劇を見ては、自分の剣の腕に磨きをかけているのだろうと思うと、思わずクスクス笑いが込み上げてくる。

あまりに可愛らしい彼にはつい手を伸ばして抱き上げたくなるが、自由を愛する少年はとにかく人に構われる事は好きではないらしく、私の手を振り払っては自分の好きなようにやりたい事をやっており、この時はソファの上で王様の様に寛ぎながら、自分の身近にあるものをワザと乱暴に床に放り投げてはケラケラ笑うという腕白な遊びにご満悦だった。

逆に少女は、一緒に遊んでくれる私にすっかり懐いてしまって、ピッタリ私の傍に張り付いて、何かやるとせがむので、私はこれまで大事に取って置いた折り紙の残りをザックの中から全部放出し、花や鶴やその他色々な物を次々に折って見せた。

そうこうしているうち、家に戻ってから台所で何かコトコトやっていた子供達の母親が、串焼き材料の残りの肉で作ってくれたらしい、水牛肉の汁麺を皆に運んできてくれた。うわぁ〜、美味しそう!!! 丁度お腹も空きはじめていた私がお礼を言って汁麺に口をつけると、これがまた今回の旅で食べてきた麺の中でも一番美味しいと思われる味だった。この若い母親はとても料理上手な人なのだ。きっと年齢を尋ねれば私よりずっと若いに違いない、小柄でホッソリとした可愛らしい雰囲気だが、二人の子供をきちんと育て、自らの商売も切り盛りする優しくてしっかりした素敵な女性だ。

こんな風楽しく過ごしていると、まるで今日初めて知り合った人の家に居るとは思われず、まるで自分が親戚の家にでも遊びに来ている気分になっていた。もし私が親戚のお姉さんみたいにこの家族と一緒にこの家に住み、串焼き屋の手伝いをしながらこの町で暮らしていたら、どんな感じだろう・・・毎日神山の神様に祈りを捧げ、可愛い子供達の成長を見守りながら観光客を相手に串焼きを売り、そのうちにカッコいいカムパの男性と恋に落ちて・・・ついフラフラと頭の中で、そんな想像の世界に漂い出してしまう。

楽しい時間はどんどん過ぎて、そろそろ小さな子供たちが寝てもよい時間になった頃、子供達の父親で、この家の主であると思われる、チベット族の男が帰ってきた。長く伸ばした髪に、カーボーイ・ハット。腰には剣をさした典型的なカムパ・スタイルだ。父親は戻ってきた家の中に見知らぬ外国人がいるのを見て、ちょっと驚いた様子だった。妻が私の事を説明してもなんだか居心地悪そうに私に背を向けており、そんな父親に少女が飛びつき、日本人のお姉ちゃんにちゃんと挨拶して、お話してよ!と絡んでいたが、それまでずいぶんゆっくり過ごさせて貰った私は、父親の帰宅でキリも良い事だし、ソロソロおいとまする事にした。

「お姉ちゃん、帰らないでうちに泊まって! 私と一緒に寝ようよ」と少女はせがみ、母親も「泊まて行かない?」と訊いてくれたが、さすがにそこまでお世話になるのは気が引けたのと、自分の家で寛げない様子の父親にも申し訳なく、丁重にお礼を言って家を後にした。

真っ暗な路地を通り抜ける道案内で、懐中電灯を持った母親が表通りまで私を送ってくれた。ほんの半日、一緒に居ただけなのに、不思議と気持ちが通じ合えるように感じられたこのチベット族の若い母親の事が大好きになっていた。別れがたい気持ちを抑え、暗闇の中でしっかり抱き合ってお別れすると、暗い影の中で互いの姿が見えなくなるまで手を振り合いながらその場を立ち去り、私は少しだけ濡れた目尻を指で拭いた。

標高の高さから夜間はグッと冷え込む町で、暗く、シンとした目めき通りを自分の宿に向かって歩く道のりも、この日は胸の中がほんのり暖かった。旅の後半、一人で過ごす時間が多くなり、塔公に来てからはヒューヒューと吹き渡る高原の風に吹かれながら、一日一日と旅の終わりを引き伸ばし、引き伸ばして過ごしていた孤独な胸の中にポツとろうそくが灯ったようなひと時だった。

塔公の町を出れば後は康定に戻り、そして成都に戻って飛行機の手ケットを買い、日本に帰るだけだ。この塔公が事実上、旅の終わりの土地だったが、その最後の最後をこんな風に過ごせて本当に良かった。これで心置きなく塔公を立ち去る事

が出来ると。深い満足に包まれて最後の塔公の夜の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

翌朝も相変わらず爽やかな明るい高原の朝だった。いつものように、すっかり馴染みとなっている例の不味い汁麺屋に足を運んだ。不味くて汚い店ながら毎日通っていれば僅かながらの愛着も湧いて、今日で最後と思えばそれなりに感慨深かったが、これだけの常連客に愛想笑いの一つも浮かべないこの店の店主はいったい毎日、何を考えて生きているんだろう。さして忙しいとも思えない店の経営の合間に、自分の料理をあと少しでも美味しくする工夫でもしようと思わないのか?

昨夜のチベット族の若いお母さんが作ってくれた汁麺は美味しかったな・・・あの人がお店をやった方が良いのに。

一人で勝手な事を考えながら最後の麺を食べ終わると、通りに歩き出した。

今日康定に戻ると決めてはいたものの、この町にはバスターミナルなど存在せず、どのように康定まで戻るかは行き当たりばったりだが、その件について私は全く心配していなかった。この辺りで一番大きな街となる康定までの交通手段は必ず存在するし、車でこの町を行き来している人間は、おそらく皆タクシーの運転手だろう。康定まで至らずとも適当にそちらの方向に行く乗合タクシーに乗り込んで途中の町まで行けば、またそこから康定に向かう車はいくらでもある筈だった。

最後の朝の散歩として、町の端にある小高くなった場所のチョルテンに登り、相変わらず真っ青な空を横切って町の上をたなびく色とりどりのタルチョを眺め、高原の向こうから吹き渡る風を感じた。すっかり観光化された土地だとの話もあるが、私はこの神様に囲まれた、こじんまりした町が大好きだ。きっといつか再び、この土地に帰ってくる。そう胸に刻んでチョルテンの丘を下ると、そこにチベット族の若者が乗った白い車が停まっていた。

「あなたタクシーの運転手?」

「そうだよ」

「私は今日康定まで行きたいんだけど、行く?」

「ああ、いいよ。だがお客が一人だけじゃ赤字になっちゃうから、ちょっと待ってくれ。他にも康

定に行く人間を探しておくよ」アッサリと話が決まり、待ち合わせの時間と場所を約束すると、青年の携帯電話の番号を聞いてその場は別れた。

私は約束の時間まで、お寺の門前町に立ち並びお土産やアクセサリーの店を冷やかして、塔公を訪れた記念に綺麗な緑色の石が連なるネックレスを買った。

約束の時間に道端で先ほどのタクシーが来てくれるのを待ったが、約束したタクシーは一向に訪れる様子がなかった。30分ほど待ったところでその辺の雑貨屋に頼み、先ほど運転手に渡されていた携帯電話の番号に電話をかけて貰うと、案の定「他に用事ができたから行かれなくなったんだ。ごめんねー」とアッサリ言われてお終いだ。

やっぱりね・・・アジアの旅で、こんなことは良くある事だ。携帯で連絡がついただけでも有難いものだ。それじゃあ、どうしようかな、と思っていたところに丁度乗合タクシーが通りかかり、運転手が「新都橋！新都橋！」と叫んでいた。

新都橋とは、シンドウチャオ塔公と康定の間にある町の名前だ。ああ～、丁度良いじゃん！！

「乗る、乗る～!!!」

私が車に駆け寄り「本当は康定まで行きたいんだけど・・・」と告げると短気そうな運転手は、「いいから乗れよ、まずは新都橋だ。そこで康定に行きたい人間がいれば行くさ」とせわしなく私を車のシートに追いやると、それで定員一杯になったらしいタクシーは、草原の真ん中を貫いて走る幹線道路を滑る様に走り出した。「さようなら塔公。また来るね・・・」少しはしんみり別れを惜しみたい私のセンチな気持ちなど、入り込む余地もない慌ただしい出発だった。

今日のうちに康定まで辿り着けるか判らないけど、まあいいや。とりあえず新都橋まで行ってしまえば、今日はそこに泊まったって良いのだ。元々理塔からの帰り道、初めから新都橋に泊まって塔公に来れば良かったものを、土地勘が無い為にわざわざ康定まで行ってから、再び塔公まで戻るなど無駄な遠回りをしてしまった。せっかく別の町に泊まれるチャンスだったのと思えば、ビザ切れまでの予備の日程もまだ1、2日程度はあるし、

今夜新都橋に泊まるのも悪くないアイディアに思えた。

とにかく、この先どちらに転んでも問題無しとなった事ですっかり安心した私は、見知らぬ人達との相乗りタクシーのシートにリラックスした気持ちで身を投げ出した。

車窓を流れていく高原の風景もこれで見納めだ。しっかり目に焼き付けておかなくちゃ・・・そう思ったのもつかの間、車の揺れに身を任せ、いつの間にかうつらうつらとまどろんでいた。

ガタガタと車が停車する振動に目が覚めた時は新都橋だった。新都橋という町の事は全然知らないが、康定から理塔に向かう長距離バスでは、いつもこの町の市場の脇がトイレ休憩の場所となっている。最近では中国でも少なくなってきたらしい、身震いするほど汚くて壁もドアも無い、使用にはちょっとした覚悟が必要な、俗にいうニーハオトイレだが、背に腹は代えられず毎回立ち寄る事になっており、一月前、この旅の出発で康定から理塔に向かった時は、バスの中で知り合ったスウェーデン人の女性とここで並んで用を足したのだ。そんな事もあって、この新都橋のトイレだけは、私にとって馴染み深い康定から理塔までの道のりで、変に印象に残っている場所でもあった。

「小姐、康定まで行くんだな？ よし、客を集めるからちょっと待ってろ」

私が休憩がてら市場のニーハオトイレで、覚悟の用事を済ましたりしている間、短気そうな運転手はちゃんと私の要望を叶える努力に努めてくれたらしく、さして待つ事も無く康定行きのお客で車のシートは埋まってしまった。

一時は新都橋に泊まってみるのも面白いかとの気持ちが動いていたが、せっかくの運転手の努力を無下にする訳にはいかず、改めて考えればビザ切れまでにさほど日数も無いのに、帰国の航空券も無く、手持ちの中国元も底を尽きかけている立ち場としては、やはり素早く康定まで戻れる事は有難かった。そうして運転手に感謝しながら再び車中の人となった私は、程なくしてこの日のうちに無事康定まで戻る事ができたのだった。

(続く)